

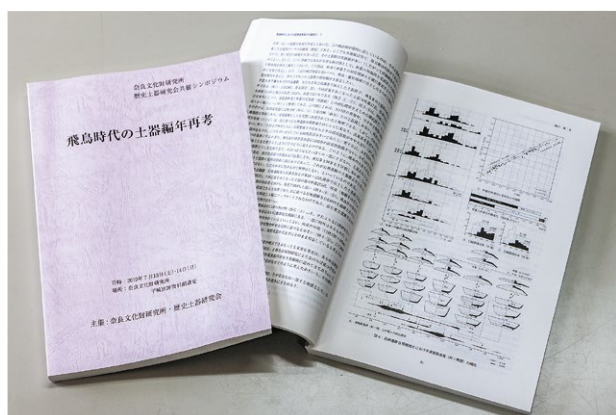
研究集会「飛鳥時代の土器編年再考」の開催

7月13・14日の2日間、歴史土器研究会との共催で研究集会を開催しました。テーマは、飛鳥時代の土器の年代観を改めて検討し直してみることです。飛鳥時代の土器が時代とともにどのように推移・変化したのかについては、1970年代に現在の通説である5時期区案が示されて以来、暦年代観の微調整はありましたが、今日まで基本的な認識の枠組みに大きな変更はくわえられていません。しかし、石神遺跡をはじめとする飛鳥地域の遺跡や、藤原宮・京から出土した土器群の研究が進む中で、これまでの暦年代観や土器様相の変遷観を単純に適用するだけでは、説明できない土器の存在があきらかになってきました。

そうした状況をふまえ、研究集会では宮都と各地の土器研究者7人による研究報告の後、約2時間にわたって討論をおこないました。討論では紙上報告者1名もくわわり、活発に意見がかわされました。実物の土器資料を見て議論をしようという趣旨のもと、あわせて開いた土器見学会もすこぶる好評で、最終的に284名もの参加者を得て、大変賑やかな研究集会となりました。

共催の歴史土器研究会は、奈文研の研究者が呼びかけ、古代宮都遺跡の発掘調査従事者が集まって、1984年に結成した研究会が母体で、現在は広く歴史時代の土器を研究しています。奈文研では、官衙や古代瓦の研究集会を継続的に開催していますが、土器の研究集会は久しぶりでした。研究成果を広く知っていただけるよう、今後も同様の企画を考えてゆく予定です。

(都城発掘調査部 尾野 善裕)



研究集会で刊行した発表要旨集

ICOM-CC オフサイトミーティングを開催して

9月1日から7日にかけて、第25回ICOM(国際博物館会議)大会が、「文化をつなぐミュージアム―伝統を未来へ―」をテーマに、国立京都国際会館をメイン会場として開催されました。ICOMは1946年に設立され、現在138の国と地域を代表する会員から構成される巨大な組織です。その中に、テーマを絞った委員会や地域連盟、ワーキンググループ等が多数存在しますが、ICOM-CC(保存国際委員会)も、こういった組織のひとつです。

会議期間中の9月5日、ICOM-CCのオフサイトミーティングを奈文研で開催しました。奈文研が選ばれたのは、東日本大震災後の被災文化財に対する活動の実績が知られていたためで、当日は震災時の文化財保護に関心を持つ46名の専門家を、洋の東西を問わず文字通り世界各地から迎えての開催となりました。

半日間のオフサイトミーティングは、松村所長の挨拶に始まり、庄田による奈文研の組織や活動の紹介、中島アソシエイトフェローによる被災文書のレスキュー事業に関する説明の後、都城発掘調査部の木器・木簡、土器、瓦の諸整理室、埋蔵文化財センターの環境考古学、年輪年代学、遺跡・調査技術の各研究室のバックヤードツアーを、3つのグループに分かれておこないました。参加者からは、レスキュー対応に使われた真空凍結乾燥機だけでなく、発掘現場から運ばれてきた土壌の洗浄や、微細遺物の選別作業等、日々おこなわれている細かで地道な作業に接し、驚嘆と称賛の声が多く聞かれました。

(企画調整部 庄田 慎矢)



整理室見学の様子